

新訂版刊行への序文

xi

Vルート

「解説」を書くにあたって

xviii

金時計

はじめに〈初版のはじめに〉

xxii

治療のあとは？

第1章 『のりこの相談手帖』より

① 寂しさは……

トシヒコ君

2

もうちよつとの辛抱

4

災害のあと

6

更生能力って？

8

寂しさは……

10

入所できません

12

第1章 『のりこの相談手帖』より

② 浜子さんの入院

夕暮れどき

夕暮れどき

もう一つの救急隊

もう一つの救急隊

死から生への交差点

死から生への交差点

浜子さんの入院

浜子さんの入院

もしもの時

もしもの時

救急車の音色模様

救急車の音色模様

彩鮮やかなブラウス

34

家族の苦悩

36

百聞は一見にしかず、とはいえ

38

家族のお迎え

40

元気？

元気？

相談室の友人たち

相談室の友人たち

第1章 『のりこの相談手帖』より

③ 風のように

仁義なき世界

44

支えあって

46

道端の花

48

風のように

50

一人だけのできごと

52

第1章 『のりこの相談手帖』より

④ 神様の水

カオルさん

カオルさん

老夫婦のSOS

老夫婦のSOS

むすこの年齢

むすこの年齢

おつうじ

おつうじ

神様の水
やっぱり、いる！
長期入院
花のメッセージ
肝っ玉かあさん

74 76 78 80 82

初めての車いす旅行
タツクのスボン
病気のおかげ
初笑い
神様の訪問

第1章 『のりこの相談手帖』より

⑤ 初笑い

山のくらし
一本の電話から
光る海
ふたりで

86 88 90 92

第2章 『いごっぱち』で

娘のきもち
胸のうち
明日、謝れないかも
誰かのために
タミさんの青あざ

明治の男

リ・クリエーション
戦友
人の輪
金魚のふん
文化祭
小さな社会

116 118 120 122 124 126 128

自動販売機

フェイス・ツー・フェイス
おばあちゃんの部屋
社会参加

あとがき 〈初版のあとがき〉
著者略歴

特別寄稿

第3章 鏡の存在

魔法の鏡
ポリデント
ソーシャルワーカーの功罪

132 137 140

金時計

『極道の妻たち』のデモが新聞で報じられた。暴力団対策新法に反対する東京・銀座のできごとである。

かつて、全国的に有名になった『抗争』よりもっと昔のことだが、その『妻』の一人が病院に運ばれた。面接時の話によると、夫は彼女を軟禁して暴力をふるった。決死の覚悟で逃げた彼女は、数日間廃屋に潜んでいたが傷が悪化し、這い出して助けを求めたのだという。色白でスラッと背が高い彼女の右足は、焼け石をあてられた火傷がひろがり、化膿していた。詳しい内容は言わなかったが「夫から隠してほしい」と泣いた。ソーシャルワーカーは慎重に関係機関と連絡をとった。病棟に協力してもらい、病室の名札もつけなかった。

治療は順調にすすみ、やがて通院可能な状態に回復したが帰るところがない。婦人相談所は、治療期間中の保護はできないとのこと。そのうち彼女の入院は夫に察知されるところとなった。

「逃げたい」と怯える彼女に、夫と話しあうことの説得は効かなかった。幸い傷は小さくなっている。

「どうするの、これから」。ワーカーの問いに、彼女はポケットから腕時計を出した。「これで松山に行く」。それは派手な金時計で、以前、夫に貰った物だそうであるが、いかにもそれふうで、緊迫した会話の中なのに二人で笑ってしまった。

翌朝、駅前^{*}の質屋でワーカーの名前で換金し、彼女は松山行きのバスに乗った。「元気で働いている」という住所のない便りが数通届いた。その後音沙汰がなくなって十年近い。

今、あの『妻』がどこでどうしているのか、ワーカーには知るまでもない。

*ここまですれば文字通り「ソーシャル」ワーカー。ここまでするかとも思うが、患者にとってはこの方策こそかけがえのない「退院調整」「退院支援」であったろう。

山のくらし

樹木も燃えてしまいそんな炎暑のなか、山あいの村を訪ねた。病院から車で一時間半、谷間を縫って家々が点在する集落である。

山の斜面にへばりつくように建てられた家の縁先に腰かけ、満面の笑みで患者さんが迎えてくれた。彼女は退院後五日目、右半身マヒ。装具と杖で平坦なところをやっと歩ける程度、年老いた夫と二人暮らしである。

三週間前、夫や親類の人をまじえて病院で話しあった。

「いま帰らないと帰れんようになる。うちに帰って自分で身体をなおす」。

それが彼女の主張であった。戦争中の負傷がもとで今でもときどき意識消失発作をおこす夫のかわりに、長年、ミツマタを採るといふ山

仕事をしてきた。病気によるマヒに重ねて膝痛が悪化していた。みんなは車いすの使えない環境での生活を心配した。しかし最後に「しょうがない」と、夫のひとことで、自宅に帰ることが決まった。

継続医療室の初回訪問で、看護婦と一緒に生活状況を見に行った。軒の下、庭のあちこちに丸太棒がくくりつけられていた。それを支えに彼女は両足を腫らすほど毎日歩き、「痛い」と言いながらも満足している。家事は夫がしているが、かなり不自由な暮しぶりである。

終始、無言で妻とのやりとりを見ていた夫の耳元で「困っていることはないですか」と聞くと、

「困*ってもしょうがない」

耳が遠くなっている彼は、えびす様のような穏やかな顔をしてそう言った。

帰途、ワーカーは不満の多い自らの生活を恥じた。

*とにかく皆の「覚悟」が違う。この話を読んで思うのは、病気を治すのは医療関係者だけでなく、本人や家族も一緒になってのことだということ。やれ環境調整だ、医療資源だという前に、整えるべきは気持ちのほうなのかもしれない。

明日、謝れないかも

ぬーっとヒロキさんが事務所に顔を入れて時計を見る。

「いま十時二十分よ」。時計を指さし、時刻を伝える。

また顔だけ差し入れる。「いま十時半。まだですよ」

ヒロキさん、デイケアで『いごっばち』に到着した直後から頻繁に時刻を尋ねる。発語はない。時間が気になっていくわけではなく、「自宅に帰りたい」気持ちの消極的な意思表示である。

ショートステイの時も同様に繰り返し、事務所を覗く。「あと一日ね。明日、奥さんのお迎えがあるから」とカレンダーの日を指さす。

ヒロキさんは本当は、デイケアや二泊三日のショートステイに来たくはない。病身の奥さんに懇願されて利用している。奥さんが倒れたら大変だということは理解できているようで、不承不承である。そして、決して「帰りたい」と言うことはない。

その奥さんから聞いた話が忘れられない。

毎晩、寝る前にヒロキさんに「今日はごめんなさい」と謝るそうである。突然、自宅から飛び出して行きそうになったり、行動がおかしくなったりすると、つい大声を出して制止してしまう。「二人ともこんなだから、明日、謝ることはできないかもしれないから」。

そして並べた布団に入るときには、二人の右腕と左腕をひもで結んでいると言う。「どちらかに変わったことがあれば、気がつくように」。病身の奥さんがようやくとで、痴呆の進んだ夫を介護している。

しかし、施設に入所させる気持ちはない。ヒロキさんと一緒にいるからこそ、「私は生きよう、生きていたいと思える」と。

*痴呆の人を介護する家族の負担は大きい。老夫婦世帯ではなおさらである。そして、このようにお互いを確かめながら日々暮らしている人たちがいる。

*痴呆（認知症）の介護はしんどい。最近では病気の理解が進み、何もわからなくなっているのではなく、特に初期には本人も苦しんでいるということがわかってきて、尊厳を守る介護の必要性が強調されている。しかし一方では、弄便や徘徊などの症状も厳然としてあり、その介護の悲惨さには厳しいものがある。今はなぜか認知症介護を美談として語る風潮があるが、認知症の介護にはこのような厳しい現実があることも伝えていくべきだろう。